

萩

Vol 68

ものがたり

# 日本の近代を拓いた 萩の産業人脈

— 企業家たちの情熱と挑戦 —

樋口尚樹

田村市郎

藤田三郎

鮎川義介

久原房之助

H2

フ



発行所 氏寄贈

シリーズ  
萩  
ものがたり ③

# 日本の近代を拓いた萩の産業人脈

— 企業家たちの情熱と挑戦 —

樋口尚樹



藤田伝三郎銅像除幕式当日 明治44年（1911）6月29日（萩博物館蔵）  
左：藤田平太郎（伝三郎長男）、中：喜多（伝三郎妻）、右：富子（平太郎妻）

表紙：前列 左…藤田伝三郎（DOWAホールディングス株式会社提供）  
前列 右…久原房之助（JX日鉱日石金属株式会社提供）  
後列 左…田村市郎（日本水産株式会社提供）  
後列 右…鮎川義介（日産自動車株式会社提供）  
背景写真…児島湾干拓地（岡山市第二藤田学区連合町内会提供）  
裏表紙：小坂鉱山事務所（小坂町総合博物館郷土館提供）

## 目次

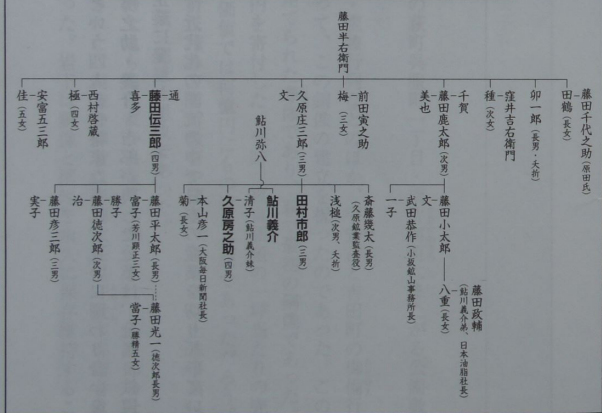
|                 |    |
|-----------------|----|
| はじめに            | 3  |
| 藤田伝三郎編          |    |
| 萩の恩人・藤田伝三郎      | 5  |
| 豪商藤田家           | 9  |
| 藤田伝三郎の多彩な事業     | 10 |
| 小坂鉦山の経営         | 11 |
| 大森鉦山の復興         | 16 |
| 児島湾の干拓          | 18 |
| 藤田伝三郎の社会文化事業    | 21 |
| 久原房之助編          |    |
| 久原房之助の帰郷        | 26 |
| 久原房之助と藤田組の分離    | 29 |
| 日立鉦山の開業と久原鉦業の設立 | 32 |

## はじめに

今年、平成二十四年（二〇二二）は、明治期に関西財界のリーダーとして君臨した藤田伝三郎の没後百年にあたります。伝三郎は萩の出身ですが、今ではその名前、ましてやその業績を知らない人が多くなつてしまいました。伝三郎が源流となつて興つた企業は、金属・鉄道・紡績・電気・建設・新聞・観光など多岐にわたり、現在わが国を代表する企業に成長しています。

伝三郎には、久原房之助・田村市郎という甥がいました。二人とも萩の出身です。また、房之助の義兄には、鮎川義介がいました。義介は萩の出身ではありませんが、父は萩藩士として幕末期まで萩城下に住ん

藤田伝三郎・久原房之助・鮎川義介・田村市郎系譜略図



|                              |    |
|------------------------------|----|
| 日本汽船笠戸造船所の設立と<br>下松大工業都市建設計画 | 38 |
| 政治家への転身                      | 40 |

### 鮎川義介編

|                   |    |
|-------------------|----|
| 鮎川義介と萩史蹟産業大博覧会の開催 | 43 |
| 萩藩士鮎川家と鮎川義介       | 44 |
| 戸畑鑄物の創業           | 47 |
| 日産自動車の設立          | 49 |
| 日産コンツェルンの構築       | 53 |
| 鮎川義介の絵画趣味         | 55 |
| 田村市郎編             |    |
| 田村市郎と水産業の推進       | 57 |

### 参考文献

でいました。

縁戚関係にあった伝三郎・房之助・義介・市郎という四人の企業家たちは、互いに関わり合いを持ちながら事業を展開させていきました。特に、房之助・義介・市郎が興した企業は、金属・鉄道車両・自動車・水産など、現在わが国を代表する企業に発展しています。

本小冊子では、彼ら企業家たちが明治維新以降、近代化の潮流の中で日本の産業を切り拓いていく、夢と情熱をかけた挑戦の軌跡をたどります。

## 藤田伝三郎編

萩の恩人・藤田伝三郎

明治四十四年（一九一）六月二十九日、当時の萩町呉服町一丁目・南片河町にまたがる公園敷地内で、銅像の除幕式が盛大に挙行された。

この日、萩町の各町内からはシャギリ・踊り車・変装行列などのほか、平安古と吉田町の御備行列（大名行列）も練り出した。萩町の住民がこぞって、この銅像の建立を祝ったのであった。この銅像の人物こそが藤田伝三郎で、伝三郎の生前に建てられた寿像であり、萩で最初の銅像であった。

伝三郎は明治三十九年（一九〇六）萩町に三万円を寄付した。当時、東京銀座の一坪当たりの売買価格が五百円ぐらいであったから、現在の貨幣価値では何億円にもなる金額であっただろう。萩町では、この寄付金を藤田慈善金として特別会計に積み立て、教育や福祉、さらには土木事業にも役立てた。まさに、当時の萩町の住民にとって、伝三郎は大恩人であった。

銅像が建立された場所は伝三郎の生誕地で、その土地も藤田家から萩町へ寄付され、伝三郎の号にちなみ「香雪園」と名づけられ公園として整備された。銅像の作者は彫刻家長沼守敬、寄贈者は大阪北浜銀行頭取をつとめた企業家岩下清周であった。岩下は銅像と園地を永久に保存維持するこ



藤田男爵家顕彰碑  
(萩市立明倫小学校内、萩市江向)

田家本邸を出発した靈柩は、午後三時十五分によく葬儀会場の長柄墓地（大阪市北区）に到着した。その行列は、十数町続いたという。参会者は三千人、一般会葬者は数千人に及んだ。伝三郎の墓は、京都市東山区の知恩院にある。おそらく伝三郎としては、生誕の地萩に帰りたかったに違いない。伝三郎の遺言によって、大正二年（一九一三）長男平太郎は萩町に二万円を寄付し、そのうちの一万円を明倫小学校の講堂建築費に寄付した。講堂は大正三年に完成し、翌大正四年、平太郎の寄付を顕彰して明倫小学校内に「美拳鴻徳」と刻まれた石碑が建立された。

伝三郎の銅像は萩だけでなく、大正五年（一九一六）大阪にも建立された。作者は、萩に建てられた銅像と同じく長沼守敬であった。銅像の建設にあつては寄付を募り、宇治川電気（現在、関西電力）の千五百円を筆頭に、南海鉄道（現在、南海電気鉄道）千円、大阪紡績（現在、東洋紡績）五百円、大阪毎日新聞（現在、毎日新聞）百円などや、大阪株式取引所五百円、東京株式取引所三百円、

とという条件を付けて、園地の維持費を萩町に寄付した。しかし、銅像は太平洋戦争時の金属供出によって取り除かれ、戦後の昭和二十一年（一九四六）園地にNHK萩中継放送所が設置され、いつしか「藤田伝三郎」あるいは「香雪園」も市民の脳裏から忘れ去られようとした。

銅像の除幕式には伝三郎自身は参列せず、妻喜多と長男の平太郎夫妻が列席した。当日は午前六時に五発の煙火が打ち上げられ、銅像建立地付近の住民、官公庁の職員、陸海軍の将校など三百余名を招き午後一時から除幕式が催され、式後には餅撒きも行われた。藤田家としては、約二十年振りの帰萩であったという。

銅像が除幕された同年の八月二十五日に、伝三郎は男爵を受けられるが、翌明治四十五年（一九一三）三月三十日、享年七十二をもって逝去した。葬儀は四月四日に行われ、午後一時に網島（大阪市都島区）の藤



淀川橋を渡る靈柩（「藤田伝三郎葬儀写真帳」坂井 禎氏蔵）

豪商藤田家

藤田伝三郎は、天保十二年（一八四二）五月十五日、萩城下南片河町で酒造家藤田半右衛門の四男として生まれた。藤田家の屋敷は、萩城下から萩城三の丸に入る中の総門のほぼ真向かいに位置していた。

嘉永六年（一八五三）萩城下の洪水被害を緩和するため、城下の北東近郊に姥倉運河の開削が起された。その際、半右衛門は工事人夫たち千人分の飯米を萩藩に献納している。また、文久三年（一八六三）外国船からの砲撃に備えるため萩城下北側の日本海に面する菊ヶ浜に土塁を築造した時も、伝三郎の兄藤田鹿太郎は、金十五両を萩藩に献上している。このように藤田家は、萩城下の有力な豪商であった。現在、南片河町の藤田家屋敷の跡地には、「藤田氏旧宅地」と刻まれた石碑が建っている。

もともと藤田家は、周防国都濃郡豊井村（現在、山口県下松市）に居住して酒造業を営んでいたという。明治三十一年（一八九八）に刊行



「藤田氏旧宅地」の石碑（萩市南片河町）

萩町百円などであった。また、個人としては久原房之助（伝三郎の甥）・鴻池善右衛門・岩崎久弥・三井八郎右衛門の各五百円を筆頭に、毛利元昭（旧萩藩主毛利家）二百円、田村市郎（伝三郎の甥）百円など、全国各地の四四〇六口にも上る企業や団体・個人から寄付金三万八千七百七十一円余が集まった。寄付の多さからも、伝三郎が財界人として重要な地位を占めていたことがうかがえる。銅像は大阪堂島（現在、大阪市北区）の藤田組本店の北側に建てられたが、太平洋戦争の金属供出によって撤去された。現在は、銅像が建っていた台石が、大阪市都島区網島にある藤田美術館の庭園に移されている。

なお、藤田組の本店は大正二年（一九一三）に新築、完成し、その偉容を誇っていたが、平成七年（一九九五）地上二十一階、地下二階の高層の新藤田ビルとして生まれ変わった。



藤田組本店（DOWAホールディングス株式会社提供）

された「山口県社寺名勝図録」(平成元年マツノ書店復刻)に、周慶寺という寺院の鳥瞰図が掲載されている。周慶寺は、初代徳山藩主毛利就隆の生母二の丸の菩提寺で、豊井村に所在した浄土宗の寺院である。この寺院の鳥瞰図には、「藤田家廟」と記され垣で囲まれた立派な墓所が描かれている。この墓所は伝三郎死後に、京都の浄土宗本山知恩院に改葬された。現在、周慶寺に藤田家の墓所はなく、江戸時代の終わりごろまでの藤田家の位牌が安置されている。おそらく藤田家は江戸時代の終わりごろに、下松から萩へ移住してきたのであろう。

#### 藤田伝三郎の多彩な事業

藤田伝三郎は「実業界に入って国家に貢献」という志をいだし、明治二年(一八六九)大阪に出て藤田組創業の端緒となる軍靴の製造を開業した。明治六年には、実兄の藤田鹿太郎と久原庄三郎も上阪し、伝三郎の事業に参画し、土木建設業も行うことになった。明治十年に勃発した西南戦争によって軍靴の需要が増大したため、藤田組は巨額の利益を得て、その後、土木建設業を中心に積極的に事業を拡大、展開していった。明治十四年に藤田組は、その組織を伝三郎・鹿太郎・庄三郎の三兄弟の組合とし、社主頭取には伝三郎、取締には鹿太郎と庄三郎が就任した。

この時期に藤田組が手懸けた主な事業は、次のとおりである。まず、明治十一年(一八七八)萩出身の鉄道局長井上勝が指揮した京都・大津間の鉄道工事を請け負い、日本人のみの手でわが国初

めての山岳トンネル逢坂山隧道を完成させた。ついで明治十五年には、大阪紡績(現在、東洋紡績)三軒屋工場の建設を請け負い、藤田伝三郎が初代頭取に就任した。さらに明治十八年には、大阪・堺間の鉄道建設工事を請け負い、わが国初の民間鉄道会社である阪堺鉄道(現在、南海電気鉄道)を設立した。翌明治十九年には、琵琶湖の水を京都に引いて水運や水力発電に利用するため、琵琶湖疎水工事を大倉組と共同で請け負った。この事業は、後に伝三郎や大倉喜八郎らが創設した日本土木会社(現在、大成建設)に引き継がれ、明治二十三年に完成した。

このほか、明治二十二年(一八八九)に関西の一大新聞であった大阪日報を大阪毎日新聞(現在、毎日新聞)と改称、兄久原庄三郎の娘婿で藤田組支配人を務めていた本山彦一を相談役に就任させた(明治三十六年、社長に就任)。また時代は下るが、明治三十九年、当時水力発電としてはわが国最大の宇治川電気(現在、関西電力)の創立委員長に伝三郎が選任され、設立にこぎつけた。

このように藤田伝三郎あるいは藤田組は、建設・鉄道・紡績・電気・新聞など多彩な事業展開をしていったが、藤田組の主要事業は鉱山業と干拓事業であった。

#### 小坂鉱山の経営

明治十七年(一八八四)藤田組は、明治政府から小坂鉱山(現在、秋田県鹿角郡小坂町)の払い下げを受けた。小坂鉱山は江戸時代から開発され、明治維新後は日本一の銀山として成長していた。

蔵)には、「妻子ハ素より職員下人等迄ニも毛利家之御保助を蒙り、我家ハ家業継続成候事ニ付、毛利家及井上伯爵之命令ハ仮令犯ストも背ク事不能」と、藤田組の事業が継続できたのも毛利家の資金援助のお陰であり、毛利家と井上馨の命令には犯すことがあっても、背くことはできないと言っている。ちなみに、伝三郎の長男平太郎は、文部大臣や司法大臣などを歴任した芳川顕正の三女富子と結婚したが、この婚約についても井上が結納などの世話にあたった。井上は、藤田家の公私にわたって深く関与していたのだ。

さて、経営が悪化した小坂鉱山を再生したのが、藤田伝三郎の甥にあたる久原房之助であった。房之助は、明治二十四年(一八九二)藤田組に入社、小坂鉱山に赴任した。明治三十年には所長心得に就任、気鋭の技術陣を登用して、黒鉱(亜鉛を主体に金・銀・銅など種々の有用金属を含む硫化物)の製錬法の開発に取り



小坂鉱山電錬場全景 明治41年(1908)ごろ  
〔小坂鉱山写真帳〕小坂町総合博物館郷土館蔵

藤田組による鉱山経営は当初は順調に推移していたが、銀鉱石(土鉱)の減少によって明治二十一年には早くも産銀量が頭打ちとなり、加えて明治二十八年に終結した日清戦争後の不況と金本位制移行による銀価の暴落は、鉱山経営の危機に追い打ちをかけた。

このような状況を打開するため、藤田組は旧萩藩士で初代外務大臣をつとめた井上馨の斡旋により、旧萩藩主毛利家から融資を受けた。それでも経営は好転せず、毛利家は藤田組に対し小坂鉱山から撤退するよう要求したほどであった。明治二十四年(一八九二)毛利家から二回目の融資を受けた年の十一月二十八日付で、伝三郎が井上に宛てた書簡(国立国会図書館憲政資料室蔵、以下国会図書館蔵)には、第一に書画骨董・衣服・住居等へ一切お金を使わないとともに、飲食も極めて粗食にする。次に、子女は綿服とし将来にわたり絹布は購入しない。さらに、社員の減員につとめるとある。

その後、藤田組は明治三十六年(一九〇三)に至り、債務の整理を完了し、ようやく毛利家の監督から離脱することができた。年代は不明だが、伝三郎が井上に宛てた書簡(国会図書館蔵)には、



井上馨 (萩博物館蔵)



組んだ。その結果、硫黄分を燃焼させたエネルギーで鉛石を熔かし、銅を回収する自熔製錬という技術の開発に成功し、小坂鉛山は足尾（栃木県）・別子（愛媛県）と並ぶ三大銅山に生まれ変わった。

ちなみに黒鉛製錬の陣頭指揮にあたったのが、武田恭作であった。武田は、伝三郎の兄の藤田鹿太郎の長女一子と結婚し、萩原服町の豪商武田家（江戸屋）を継いだ。明治二十六年（一八九三）帝国大学工科大学採鉱冶金学科を卒業し藤田組に入社、大森鉛山に赴任したが、明治三十年、小坂鉛山へ転勤した。

なお、小坂町は鉛山都市として発展し、大正九年（一九二〇）には人口が二万人を超え、秋田市に次いで県下第二の都市となった。電気・水道・学校・グラウンド・病院・鉄道・娯楽施設など、あらゆるインフラ整備が藤田組によって行われた。

明治四十一年（一九〇八）大館・小坂間の小坂鉄道

が開通し、鉛山物資のみでなく、一般の旅客・貨物輸送にも供された。小坂鉄道は長い間、小坂町の交通の根幹を担ってきたが、平成六年（一九九四）旅客輸送、平成二十一年には貨物輸送が廃止された。現在、旧小坂駅舎は近代化産業遺産としてよみがえろうとしている。

明治四十三年（一九一〇）には、小坂鉛山従業員のための娯楽施設として康楽館が建設された。外観は洋風建築だが、館内は回り舞台、切穴を持つ本花道など歌舞伎小屋としての機能を備えており、平成十四年（二〇〇二）国の重要文化財に指定された。現在もわが国最古の現役の芝居小屋として、大衆演劇や歌舞伎・寄席・文楽などの公演が行われている。

明治三十八年（一九〇五）小坂鉛山経営の司令塔として建設された小坂鉛山事務所は、鉛山内電鍍場の南側に位置していた。ルネッサンス風を基調とする三階建ての偉容を誇る建築は、まさに小坂鉛山発展のシンボルとなっていた。電鍍場増築の支障となるため九十二年間の役割を終え、平成九年（一九九七）から解体、移築が開始され、平成十三年に復原が完成、国の重要文化財に指定された。現在は、鉛山事務所の建築の特徴や移築復原の経緯、小坂町の近代化遺産などを紹介する展示施設として公開されている。

小坂鉛山は、平成二年（一九九〇）に鉛石の採掘を終了したが、現在は二十種類もの有価金属を製品化する複合リサイクル製錬所へ発展している。小坂製錬所内には、「富士に田の字」をかたどった藤田組の社章が入った明治時代の建物の一部が現役として使われており、小坂町のいたる所で藤



康楽館（小坂町総合博物館郷土館提供）



藤田組社章入法被 (石見銀山資料館蔵)

明治三十年代に入って、別の場所に銅の豊富な鉱脈が発見されると、明治三十四年(一九〇一)排水に改良が加えられ、発電所や選鉱場が完成した(永久製錬所)。永久製錬所では鉱石を溶鉱炉で熔かして金・銀を含む型銅をつくり、小坂鉱山に送った。大森鉱山は大正十二年(一九二三)に採掘を休止、平成十八年(二〇〇六)DOWAホールディングス(藤田組の後身)は、鉱業権を島根県に譲与した。現在、石見銀山や大森鉱山の歴史を展示、紹介している石見銀山資料館には、藤田組の社章が入った法被や布パケツが所蔵されている。なお、この法被は明治四十年に東宮殿

だったが、藤田組は銀山としてではなく、銅山として復興させた。まず、藤田組は明治二十八年に清水谷製錬所を建設したが、期待どおりの成果が上がらず、わずか一年余りで操業を停止した。この

清水谷製錬所を建設したのが、小坂鉱山で黒鉱製錬の陣頭指揮にあたった、武田恭作であった。武田は大森鉱山での経験を買われ、小坂鉱山へ招聘されたのであろう。現在、清水谷製錬所跡も世界遺産区域内にあり、大規模な石垣などの遺構が残っており、当時の製錬所の偉容を偲ぶことができる。

現在、世界文化遺産となっている石見銀山(大森鉱山、現在、島根県大田市)も、明治維新後、藤田組の経営するところとなった。石見銀山は戦国時代、大内・尼子・毛利氏間での激しい争奪戦の末、永禄五年(一五六二)毛利氏が領有するところとなったが、関ヶ原の戦い後は、徳川幕府の直轄領となった。その後、幕末の慶応二年(一八六六)に開戦した第二次幕長戦争(四境戦争)によって、石見銀山は明治二年(一八六九)まで長州軍が一時期占領した。



清水谷製錬所 (上野治子氏蔵)

田伝三郎や藤田組の遺産に触れることができる。

### 大森鉱山の復興

明治二十年(一八八七)に至り藤田組は大森鉱山の全鉱区を買取り、操業を開始した。石見銀山は再び毛利氏ゆかりの人物が経営するところとな

治四十五年には、児島湾干拓第二区工事が竣工、興除村に編入された一部を除き、藤田村(昭和五十年、岡山市に合併)が創設された。この年、伝三郎は逝去するので、まさに彼の生涯をかけた大事業であった。

ところで、児島湾干拓には、井上馨の仲介により旧萩藩主毛利家から資金援助を受けただけでなく、萩藩出身の品川弥二郎にも伝三郎は早くから相談していた。品川は吉田松陰が主宰した松下村塾生で、維新後は明治政府の内務大臣などをつとめ、農業や漁業などの信用組合設立にも尽力した。明治二十三年(一八九〇)伝三郎が井上馨へ宛てた書簡(国会図書館蔵)には、伝三郎が品川に児島湾開墾のことを申したら、品川は「此開墾ハ前後無類之事業ニ付、自分引受候事ニ相成候へハ必成功可致」と言ったと記されている。品川は、伝三郎の児島湾干拓に大きな期待を寄せていたのだ。児島湾干拓の起工許可がおきた翌年の明治三十



藤田農場で使用された米国製トラクター 大正9年(1920)藤田組が購入(岡山県立興陽高等学校蔵)

下(後の大正天皇)の山陰行啓にあわせて作られたもので、殿下が大森鉱山を視察された折に、関係者が着用し出迎えたという。

### 児島湾の干拓

岡山市の南側には、広大な田園が広がっており、岡山県を代表する穀倉地帯となっている。この地は、もともと児島湾という海であった。明治維新後、児島湾を大規模に干拓し、広大な農地に変えたのが藤田伝三郎であり、藤田組であった。岡山市周辺に住む大半の人が、藤田伝三郎の名をご存知である。特に、岡山市の藤田地区の住民にとっては、伝三郎は町を創成した大恩人なのだ。

明治二十二年(一八八九)藤田伝三郎に児島湾干拓の起工が許可されたが、水利権や漁業権などをめぐって地元住民の反対運動が激しくなり、着工は九年間八度にわたり延期された。明治二十二年九月二十日付の井上馨宛書簡(国会図書館蔵)で、伝三郎は「児島湾開墾之大望アリ、鉱山之利益よりも開墾ハ生涯之基業と奉存候」と、児島湾干拓にかける伝三郎の並み並みならぬ熱意のほどが伝わってくる。

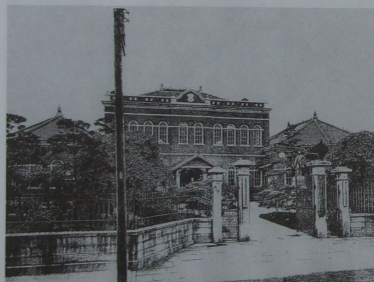
明治三十一年(一八九八)に至り、藤田組に児島湾干拓起工の許可があり、翌年ようやく干拓事業に着手することになった。干拓工事進行につれ、六百町歩余(約五九五ヘクタール)の開墾地にわが国最初の直営機械化農場を開設、明治四十年、藤田組による大規模農場経営が開始された。明

田伝三郎の長男平太郎が、境内地と社殿の建設費・維持費を寄付し、大正四年（一九一五）神社の創立が許可され、大正六年に社殿が完成した。境内には、伝三郎のレリーフ像と顕彰碑、平太郎夫人富子の歌碑が建てられている。さらに藤田地区では、平成七年（一九九五）に和太鼓を通じて伝三郎の偉業を後世へ継承するため「ふじた伝三郎太鼓保存会」が結成され、「ふじた伝三郎太鼓」の演奏活動を行っている。

### 藤田伝三郎の社会文化事業

明治十一年（一八七八）藤田伝三郎は、五代友厚（薩摩藩出身）・磯野小右衛門（秋出身）・中野梧（初代山口県令）らと大阪商法会議所（現在、大阪商工会議所）を設立し、大阪経済の振興を図った。明治十八年、伝三郎は初代会頭五代のあとを受けて二代会頭に就任し、明治二十一年までつとめた。なお、磯野小右衛門は萩から大阪に出て米穀商を営み、堂島米会所頭取をつとめるとともに、明治二十四年から二十六年まで四代会頭（大阪商業会議所時代）をつとめた。

明治十三年（一八八〇）には、伝三郎は五代ら当時の大阪



大阪商法会議所（大阪商工会議所提供）

二年一月六日付で、伝三郎が品川に宛てた書簡（『品川弥二郎関係文書6』山川出版社）には、「開墾工事に御注意被下奉謝上候」と、伝三郎は児島湾干拓工事に対する、品川の助言に感謝の意を表している。翌明治三十三年二月二十六日、品川は享年五十八で逝去した。同年三月十六日付で伝三郎が松陰の実兄杉民治に宛てた書簡（萩博物館蔵）には、「同子ハ生涯満腹之国家心にて、毫も私事ニ涉候事無之、実ニ難得人柄残念千万ニ奉存候、是全松陰先生之薫陶之結果と存候」と、品川の逝去に対し哀惜の言辭を發している。

現在、岡山市の藤田地区（岡山市南区）には、藤田組の児島湾干拓によって建設された樋門や水門・用水路などの土木遺産が多く存在している。藤田組児島湾開墾事務所と藤田農場事務所があった場所は、岡山市南区役所藤田地域センターとなっており、敷地内には昭和二十六年（一九五一）に建立された藤田伝三郎翁頌徳碑がある。また、この地区に鎮座する藤田神社は、児島湾干拓地の守護神として創建された。藤



藤田神社（岡山市南区藤田）

し、絵画や墨蹟・仏像など仏教美術品の収集につとめた。また、茶人であった伝三郎は、茶道具に対しても卓抜な鑑識眼を持ち茶碗や茶入・水指など名作逸品を収集した。伝三郎の逝去後も、長男平太郎、次男徳次郎によって収集品は充実した。

大阪網島（現在、大阪市都島区）の藤田家本邸は太平洋戦争の空襲で焼失したが、伝三郎父子が収集した美術品は戦火を免れ、昭和二十六年（一九五二）藤田家本邸跡に美術品を収蔵、展示する藤田美術館が開館した。同館には、国宝九件、国の重要文化財五十一件を含む名品約五千点が収蔵されている。

明治三十三年（一九〇〇）三月十六日付で、伝三郎が吉田松陰の実兄杉民治に宛てた書簡（萩博物館蔵）は、茶道家でもあった杉民治から自著の茶道書や松陰の士規七則の版木刷り二枚を贈られたのに対する礼状である。その書簡の中で、伝三郎は「既二還暦二も近



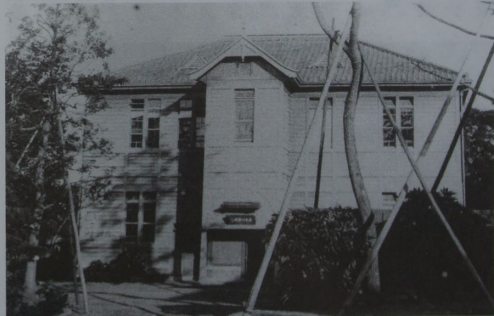
藤田美術館（藤田美術館提供）

財界の有力者たちとともに、商人の学問の必要性を痛感し、東京に次いでわが国二番目の商法学校となった大阪商業講習所を設立した。現在の大阪市立大学である。

また、伝三郎は、鉱業技術者を養成し鉱業の振興を図るため、秋田鉱山専門学校（現秋田大学）の設立にあたり、その創設資金の大半を寄付した。学校は明治四十四年（一九一〇）に開校し、現在は秋田大学工学資源学部となっている。

さらに、伝三郎は萩藩出身の成瀬仁蔵が明治三十四年（一九〇一）創設した日本女子大学校に、化学館の建設費を寄付した。化学館は当時最新の理科教育の設備を整え、伝三郎の号にちなみ香雪化学館と名づけられ、明治四十一年に開館した。現在、日本女子大学構内の香雪化学館跡地には、伝三郎を偲び香雪館と称した校舎が建てられ、一般教育棟として利用されている。

明治維新後、廃仏毀釈によってわが国の仏教美術品が海外に流れたり滅失したりしたが、伝三郎はこれを憂慮



日本女子大学校香雪化学館（日本女子大学成瀬記念館提供）

「十五き顔ル茶禪之趣味ニ投し候」と、還暦を前にして最近茶道と禪に没頭しているという。

年代は不明だが、伝三郎が井上馨に宛てた書簡（国会図書館蔵）には、古い名物茶入を所望する井上に伝三郎秘蔵の古瀬戸肩衝茶入を献上したが、小堀遠州所蔵中第一等といわれる「在中庵」という銘の古瀬戸茶入と比べてくださいとある。小堀遠州の茶入「在中庵」は渡辺驥が所有していたが、明治二十九年（二八九六）ころに伝三郎が入手し、現在は藤田美術館に収蔵されている。これらの書簡からは、伝三郎の茶道や茶道具に対する造詣の深さが垣間見られる。

大阪網島の藤田家の本邸は戦災で消滅したが、伝三郎が次男の徳次郎のために本邸に隣接して建てた東邸は焼失を免れた。現在、東邸は淀川邸と称し、藤田美術館真向かいの大岡園内にある。また、藤田家本邸の広大な屋敷の跡地は、現在、藤田邸跡公園（桜之宮公園）として整備され、大阪市の名勝に指定されている。



藤田家東邸（現在、淀川邸、大阪市都島区）

東京目白台（東京都文京区）の椿山荘は、伝三郎の長男平太郎が山県有朋から大正七年（一九一八）に譲り受けたものだ。この地は、もともと久留里藩（上総国、現在、千葉県）の江戸下屋敷であったが、明治十一年（一八七八）に山県が入手し、椿山荘と名づけ本邸として庭園を整備した。今でも園内には、山県が椿山荘の由来と園地への思いを記した石碑が残る。

箱根（神奈川県足柄下郡箱根町）にある箱根小涌園は、大正七年（一九一八）平太郎が別荘として建てたものだ。これら三か所の藤田家ゆかりの地は、現在、料亭・ホテル・レストランなどになり、藤田観光が経営している。



椿山荘の碑 山県有朋撰文  
（椿山荘内、東京都文京区）

之助の祖父に当たる久原半平が何者かに暗殺され、翌元治元年（一八六四）房之助の父久原庄三郎は、一家をあげて萩城下へ移り住んだ。房之助の父庄三郎は、天保二年（一八三一）萩南片河町の酒造家藤田半右衛門の三男として生まれた。藤田伝三郎のすぐ上の兄にあたる。安政四年（一八五七）久原文子の養子となり、須佐に住むことになった。須佐は久原家先祖代々の故地であり、房之助の須佐に対する強い思いから最初に須佐へ帰着したのだから。

須佐で大園遊会を二回開催した後、六月五日に再び汽船に乗り萩へ着いた。萩でも、指月公園で大園遊会を二回開催した。特に二回目に開催された園遊会は母文字の古稀を祝ったもので、萩及び近在の七十歳以上の高齢者が招待された。七月三日、房之助一行は今度は自動車に乗って萩を出発し、小郡（現在、山口市）を経て三田尻（現在、防府市）へ向か



久原房之助頌徳碑（旧山口市立萩商業高等学校内、萩市江向）



久原文子頌徳碑（山口市立萩高等学校内、萩市堀内）

## 久原房之助編

### 久原房之助の帰郷

明治四十五年（一九一三）五月十五日、久原房之助は母文字、妻清子、そして実兄の斎藤幾太・田村市郎を伴って須佐（現在、萩市）に帰着した。この年の三月三十日には叔父の藤田伝三郎が逝去し、四月四日には盛大な葬儀が執り行われた。この葬儀には、房之助が親族を代表して葬儀係相談役の総代をつとめた。それから約一か月余り後の帰郷であった。このたびの帰郷は祖父久原半平の五十回忌の法要が目的であったが、房之助が創業した日立鉱山の経営も軌道に乗り、房之助にとってはまさに凱旋をかねた帰郷でもあった。

須佐へは、大阪商船の汽船をチャーターして入港した。須佐は萩藩主毛利家の永代家老益田家の領地であり、久原家は須佐の浦庄屋を代々つとめていた。文久三年（一八六三）房



須佐滞在中の久原房之助一行 前列左端から房之助、斎藤幾太、母文字、妻清子、田村市郎（萩博物館蔵）

った。

房之助帰郷前の明治四十四年（一九一）母文字は、阿武郡立実科高等女学校（後、山口県立萩高等女学校、現在、山口県立萩高等学校）の創立資金として三万円を寄付した。その功績をたたえ、翌年の帰郷中に久原文子頌徳碑が建立された。現在、石碑は山口県立萩高等学校の校内に移されている。

ついで房之助は、大正五年（一九一六）萩商業学校（現在、山口県立萩商工高等学校）の建設資金として二万五千円、さらに大正八年には学校整備費として一万四千円を寄付した。その功績をたたえ、大正十一年に久原房之助頌徳碑が建立され、現在、石碑は旧山口県立萩商業高等学校の敷地内にある。

また、須佐には房之助は父庄三郎の名義で、須佐湾に波止場を築造し、明治四十二年（一九〇九）に落成式が挙行された。現在、波止場は久原波止場として残っており、波止場築造の記念碑が建っている。このように久原家も藤田家同様、故郷に多額の寄付を行った。



久原波止場（萩市須佐）

#### 久原房之助と藤田組の分離

久原房之助は、明治二年（一八六九）六月四日、久原庄三郎の四男として萩の唐樋町で生まれた。その後、久原家は萩の熊谷町に移り、房之助はそこで少年時代を過ごした。現在、その場所には「久原房之助育成之地」と刻まれた石碑が建っている。

房之助は明治十八年（一八八五）東京商業学校（現在、一橋大学）を卒業、ついで明治二十二年には慶應義塾（現在、慶應義塾大学）を卒業し、翌明治二十三年、森村組（現在、ノリタケカンパニーリミテド）に入社した。ところが翌明治二十四年、叔父の藤田伝三郎に請われ藤田組に入社し、経営危機に陥っていた小坂鉦山に赴任した。房之助の藤田組入社にあたっては、井上馨から命令があったという。

明治三十三年（一九〇〇）一月一日、房之助は小坂鉦山所長に就任し、同年九月二十五日、旧萩藩士出身の鮎川義介の妹清子と結婚した。同年九月十五日、房之助の父久原庄三郎が井上馨に宛てた書簡（国会図書館蔵）に、「房之助婚義二付テハ、不容易御厄介御懇情を蒙り居候」「何から何迄不形



「久原房之助育成之地」石碑（萩市熊谷町）



御厄介を蒙り候段、実ニ御懇情難有」と、庄三郎は房之助の結婚にあたって、井上にたいへん世話になつたお礼を丁重に述べている。ちなみに鮎川義介の母は、井上の姪にあたる。

秋田県小坂町には、小坂鉱山に赴任した房之助と妻の清子が写った写真が残されている。その写真中、房之助の背後の人物が他ならぬ井上であることがわかった。井上は、所長としての房之助の小坂鉱山経営が気にかかったのであろう。遠路はるばる、小坂の地まで視察に来たのだ。

前に述べたように房之助は、黒鉱の自熔製錬技術の開発に取り組み、明治三十五年（一九〇二）その操業が開始された。ここに、小坂鉱山は房之助によって銅山として再生した。しかし、このころから藤田伝三郎・藤田鹿太郎・久原庄三郎の三人の兄弟によって組織された藤田組に相続問題が持ち上がった。

た。つまり、藤田組経営の主導権を誰が継承するかということだ。

藤田伝三郎は、藤田組の事業は伝三郎家の当主が引き継ぐことを主張したが、この主張は特に房之助の反発を招いたようである。明治三十八年（一九〇五）四月六日付で伝三郎が井上馨に宛てた書簡（国会図書館蔵）に、「久原と衝突之義ハ甚苦<sup>はげ</sup>心仕候」と房之助と相続問題をめぐって対立しているという。続けて、藤田組が三家に分離することは、旧萩藩主毛利家と井上馨の許可を得なければできないと房之助に申し聞かせたところ、房之助は「ソナ事ガイリマスカ」と答えたという。その後、同年九月二十三日付で伝三郎が井上に宛てた書簡（国会図書館蔵）に、「小坂ハ孰<sup>たれ</sup>ノ一方が引受候ても可然」と房之助が申し出たが、小坂鉱山は房之助に渡すことはできないと申し聞かせたとある。

結局、最終的には井上馨の裁定を仰ぎ、藤田伝三郎家が藤田組の事業を引き継ぎ、藤田鹿太郎家（当主、小太郎）と久原庄三郎家（当主、房之助）には五百万円が分与された。明治三十九年（一九〇六）二月十七日付で伝三郎が井上に宛てた書簡（国会図書館蔵）に、「三家分離之件ニ付ては、国事多端中なるにも不拘、春來精細御調査之結果、御明断を以難局ヲ於昨冬、御解決被成下、為ニ二満ナル分離を遂ケ、一同安堵を得候段、謹て御礼申上候」とあり、井上の明断をもって藤田組三家の分離という難局が解決し、円満な分離を遂げたと、伝三郎は井上に対し感謝の意を表した。



小坂鉱山における久原房之助と妻清子 前列左から3人目が房之助、2列目左端が清子、房之助の背後が井上馨（小坂町総合博物館郷土館蔵）

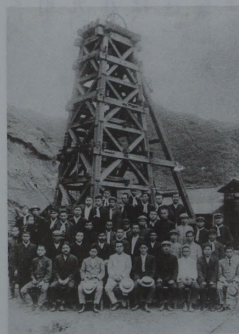
ところが、このような日立鉱山の急速な発展にともない、亜硫酸ガスによる煙害問題も深刻となり社会問題化した。その対策として明治四十四年（一九一〇）延べ一六三メートルの神峰煙道、大正二年（一九一三）には政府の命令によって高さ三十六メートル、直径十八メートルのダルマ煙突を建設したが、かえって被害を増大させた。



井上馨による日立鉱山視察 明治44年(1911) 輿(こし)に乗っている人物の先頭が井上馨、最後尾が久原房之助 (JX日鉱日石金属株式会社提供)

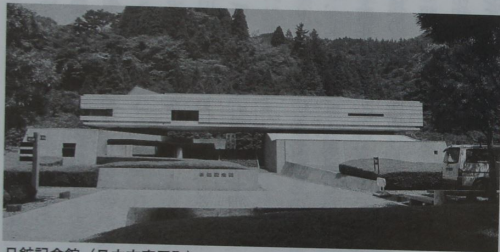
日立鉱山の開業と久原鉱業の設立  
藤田組三家の分離によって、明治三十八年（一九〇五）十二月十日、久原房之助は藤田組を退社し、翌日には赤沢銅山（現在、茨城県日立市）を買収した。そして同月二十六日には、日立鉱山と改称し鉱山事務所を開設した。房之助が藤田組を退社すると、小坂鉱山時代の房之助の部下であった竹内維彦・小平浪平・角弥太郎・米沢万隆・青山隆太郎・武田恭作も相次いで退職した。このうち退職後、自ら鉱山を経営した武田を除く者たちが日立鉱山に移り、房之助の新たな事業を支えた。日立鉱山開業から二か月後には、早くも第一豎坑の開削に着手し、明治四十年（一九〇七）には久原鉱業所の職制を制定した。井上馨は日立鉱山に資金援助を行い、明治四十一年・四十三年・四十四年の三度鉱山を視察している。明治四十一年に行われた井上による最初の鉱山視察の際、高品位の鉱脈が途切れるというアクシデントに見舞われた。しかし、井上の来山直前に断層の先に新たな鉱脈が見つかり、無事に視察を終えて資金援助にこぎつけることができた。このエピソードにちなんで、断層は井上断層と名づけられた。

房之助は大正元年（一九一〇）個人企業の久原



創業時の第一豎坑記念撮影  
前列左から4人目が久原房之助  
(JX日鉱日石金属株式会社提供)

現在、日立鉱山の第一堅坑があつたあたりは、日立鉱山やJXグループの歴史などを紹介する日鉱記念館があり、その周辺一帯は屋外展示場になっている。ここには、久原本部と呼ばれる木造平屋建ての家屋が現存している。久原本部は明治三十八年（一九〇五）日立鉱山の開業と同時に建てられ、鉱山開発経営の司令塔としての役割を担った。房之助はこの本部に起居し、鉱山経営の計画や構想を練った。房之助が大煙突の建設を着想したのも、この建物内であつた。



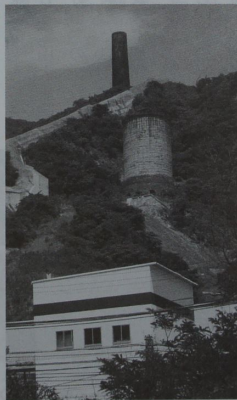
日鉱記念館（日立市宮田町）



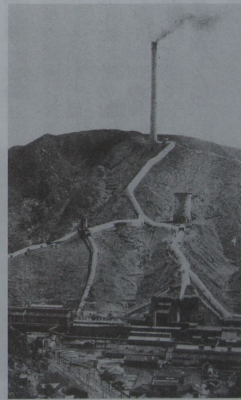
旧久原本部（日立市宮田町）

そこで、房之助は煙突を極端に高くして、煙の空中への拡散を図ろうと大煙突の建設を提唱した。大正三年（一九一四）三月、建設工事に着手し、同年十二月、当時世界一を誇った高さ一五五・七メートルの大煙突が竣工した。翌大正四年三月、通煙が行われ、その結果、煙は空高く飛び去り煙害は激減した。大煙突の建設とともに、日立鉱山では地域と一体となって自然回復のための植林が行われた。

日立鉱山の大煙突は、煙害問題の克服と自然環境回復に取り組んだ企業と地域との共存共栄のシンボルとなっていたが、平成五年（一九九三）突然倒壊した。煙突は三分の一の高さとなったが、現在も工都日立の発展を見続けている。



現在の大煙突（日立市宮田町）



煙を吐く日立鉱山大煙突（萩博物館蔵）

は、共楽館完成の四年前の大正二年に建設された。内部三階の本格的な芝居劇場で、共楽館での催し物はすべてこの劇場でも上演された。

現在、日立市を代表する企業のJX日鉱日石金属・日立製作所は、日立鉱山を起源としている。特に日立製作所は、日立鉱山工作課所属の電気機械修理工場に端を発する。当初、修理工場は日立鉱山の本山につくられたが、後に大雄院に移った。この大雄院にあった修理工場が日立製作所の「創業小屋」として、現在、日立市の日立製作所日立事業所内に復元されている。その後、明治四十三年（一九一〇）電気機械製作専門の工場が新たに建設され、大正元年（一九一二）久原鉱業所日立製作所となった。さらに大正九年、久原鉱業から独立して、株式会社日立製作所が設立された。

日立市は、久原房之助が開業した日立鉱山をその工業発展の原点としている。まさに「房之助は、日立市の近代産業発祥の先駆者として位置づけられよう。」



日立鉱山電気機械修理工場 明治42年(1909)ごろ  
(JX日鉱日石金属株式会社提供)

昭和十年（一九三五）房之助がこの地を訪れた際に、創業當時を回顧して書いた「苦心慘憺処」という額は、この本部の一室に掲げられていた。現在、この額は日鉱記念館に展示されており、旧久原本部の前には「苦心慘憺処」と刻まれた石碑が設置されている。「苦心慘憺処」という房之助の言葉には、日立鉱山を一から立ち上げた苦勞と、煙害問題の解決に立ち向かった苦悩とが込められている。なお、旧久原本部の建物は、茨城県の近代化を象徴する産業遺産として保存され、県の文化財（史跡）に指定されている。

日立鉱山にも小坂鉱山と同じように、鉱山労働者たちの娯楽施設が建設された。日立鉱山には、共楽館と本山劇場という二つの娯楽施設があった。共楽館は大正六年（一九一七）に完成し、歌舞伎などの芝居のほか、相撲の巡業、柔道、剣道の試合、小学校の学芸会、素人演芸会など幅広く利用された。戦後は常設映画館として親しまれたが、昭和四十二年（一九六七）日立市に寄贈され、現在は武道館として使用されている。本山劇場



共楽館（日立市白銀町）

界大戦によるアメリカの鉄鋼輸出禁止策の影響を蒙り、翌大正七年（一九一八）計画を断念せざるを得なかつた。なお、高級工業学校の設置計画だけは、房之助の寄付により、大正十年、山口県立下松工業学校（現在、山口県立下松工業高等学校）の創設として実現した。現在、下松工業高等学校の校内には、房之助の胸像が設置されている。

笠戸造船所は、大量の鉄鋼を要する造船をとりやめ、蒸気機関車など鉄道車両の製造に転換した。大正九年（一九二〇）笠戸造船所がその第一号機として納入したのは、佐世保海軍工廠から受注された小型機関車であった。さらに同年、笠戸造船所は、八六二〇形蒸気機関車を初めて鉄道省に納入した。翌大正十年、笠戸造船所は日立製作所の傘下に入り、日立製作所笠戸工場となり、大正十三年に国産第一号の大型電気機関車を生産した。ちなみに、八六二〇形蒸気機関車（通称ハチロク）は、笠戸工場では昭和十五年（一九四〇）までに一三七両が製作された。現在、同形の笠戸工場製のハチロクが、現役最高齢の蒸気機関車として「SL人吉」の愛称で、JR肥薩線において運行されている。



第1号機関車銘板（株式会社日立製作所笠戸事業所蔵）

日本汽船笠戸造船所の設立と下松大工業都市建設計画

大正四年（一九一五）久原房之助は、兄の田村市郎とともに日本汽船を設立し、大正六年、山口県下松町（現在、下松市）に日本汽船笠戸造船所を創業した。この年、久原房之助は「下松大工業都市建設計画」を発表し、造船・製鉄業の一大工業地帯を目指した。『防長新聞』によると、下松町周辺の四か町村に九十万坪の土地を造成し、十八万人の職工とその家族が住む世界的な模範工場として、ドイツのクルップ社やイギリスのピッカース社に匹敵する大工場を目指すところ。そして、第一期計画として造船所、第二期計画として製鉄所を建設するとある。また同紙によると、房之助が下松を選んだ理由として、下松の良好な立地条件と、下松が房之助の父庄三郎の実家である藤田家の故地ということをあげている。

房之助は上下水道・電車・公園・劇場・病院、さらには高級技術者養成のための高級工業学校を設置した理想都市を目指し、工場用地の買収を進めていたが、時あたかも第一次世



笠戸造船所遠景 後方の煙突のある建物群が笠戸造船所（萩博物館蔵）

二人の親密な関係がうかがわれる。

昭和三年（一九二八）二月、房之助は立憲政友会に入党し、山口県第一区から衆議院議員総選挙に出馬して初当選した。同年五月、房之助は田中義一内閣に通信大臣として入閣した。しかし、翌昭和四年七月、田中内閣は張作霖爆殺事件の責任をとり総辞職し、房之助も通信大臣を辞任した。同年七月末から八月末にかけて、房之助と田中はそれまでの心身の疲れを癒すかのように山口県に帰郷した。萩には七月二十九日から八月二十三日まで、房之助は田中と共に滞在したが、同年九月二十九日、田中は急逝し、田中にとっては最後の帰郷となった。

その後、房之助は衆議院議員に連続四回当選し、昭和十四年（一九三九）には立憲政友会総裁に就任した。戦後の昭和三十年には、日中・日ソ国交回復国民会議会長に就任し、中国・ソビエト連邦との友



田中義一内閣閣僚 最前列が田中義一、最後尾が久原房之助  
（『田中義一伝記 附録写真帳』）

現在、日立製作所笠戸事業所では、新幹線電車など最新鋭の鉄道車両などを製作、輸出しており、日本のみならず世界の交通システムの開発を担っている。笠戸事業所構内には創業以来のあゆみを展示している歴史記念館があるが、その入口前には房之助と日立製作所の創業者小平浪平が寄り沿う肖像レリーフがはめ込まれた石碑が建てられている。

### 政治家への転身

創業以来順調な発展を遂げていた久原鋳業は、第一次世界大戦後の恐慌の影響を受け、事業は悪化の一途をたどった。久原房之助自身も健康を害し、久原鋳業の事業

の再建を義兄の鮎川義介に委ねることにした。房之助は実業界から身を引き、政界への転身を目指した。時あたかも、立憲政友会総裁の田中義一が総理大臣をつとめており、田中と房之助は同じ萩の出身であった。大正十年（一九二一）六月七日付で房之助が田中に宛てた書簡（萩博物館蔵）には、「御暇になりなば芝居にでも御供可致」、また「必御帰京御暇之時には御電話申度」と記され、



久原房之助・小平浪平レリーフ石碑（株式会社日立製作所笠戸事業所構内、下松市東豊井）

鮎川義介と萩史蹟産業大博覧会の開催  
 昭和十年（一九三五）萩市の市制施行三周年を記念して、萩の史蹟観光振興と経済活性化を目的に萩史蹟産業大博覧会が開催された。会期は、四月五日から五月十五日までで、十一万人の入場者があったという。当時、日本産業社長の鮎川義介は、鮎川家の故地萩における博覧会の開催に賛意を表し、日本産業傘下十七社の代表者をもって博覧会実行委員会を組織して、博覧会への出展準備を進めた。日本産業としては、博覧会への出展は初めての試みであり、この博覧会を契機に傘下各社の連携強化を目指そうとした。

日本産業は博覧会会場内に日産館を建設し、傘下各社の事業内容や製品などを出展し、日産コンツェルン



日産館（「萩史蹟産業博覧会日産館写真帖」萩博物館蔵）

## 鮎川義介編

あゆかわよしすけ

好関係の構築に尽力した。昭和三十四年に須佐町（現在、萩市）名誉町民、昭和三十六年に萩市名誉市民の第一号に推挙された。昭和四十年一月二十九日、房之助は九十七歳の長寿を全うした。墓は、京都市東山区の大谷廟（西大谷）にある。なお、萩市須佐の久原公園は、房之助が旧須佐町にその土地を寄付したものだ。園内には、房之助が須佐在住の子弟教育のため設けた奨学金を受けた久原奨学生たちが中心となって、平成元年（一九八九）に建立された「久原房之助翁頌徳碑」がある。揮毫は、田中義一の長男で通商産業大臣や文部大臣を歴任した田中龍夫である。



久原房之助翁頌徳碑（久原公園内、萩市須佐）



帰郷時の久原房之助（右）と田中義一（左） 昭和4年（1929）（山口県文書館蔵）

の御物見筋に「鮎川純太」という名がある。ここが鮎川家の屋敷があったところで、真つすぐに北へ行けば藩校明倫館、南へ行けば藩主の別邸南園みなぞのがあった。

鮎川家の当主は、純太が安政四年（一八五七）に逝去した後は、金五郎、ついで弥八が継いだ。鮎川義介は弥八の長男として、明治十三年（一八八〇）十一月六日、吉敷郡御堀村（現在、山口市大内御堀）で生まれた。鮎川家は明治維新後、弥八の代に萩から山口へ移住し、そこで義介が誕生したのだ。現在、誕生地には「鮎川義介先生生誕之地」と刻まれた石碑が建っている。

義介の母、仲子は井上馨の姪に当たる。その縁で、義介は常に井上に目を掛けられ、義介が旧制山口高等学校時代に井上から「貴様はエンジニアになれ」と申し渡されたという。その言葉どおり卒業後は、帝国大学工科大学機械科に入學し、東京の井上の邸宅に寄寓しながら通學した。大学の卒業論文作成に当たり、明治三十六年（一九〇三）義介は小坂鉦山の發電所を見學した。義介の妹清子と結婚した久原房之助は、当時、小坂鉦山事務所長をつとめており、その縁で小坂を訪れたのだろう。同年、大学を卒業した義



「鮎川義介先生生誕之地」石碑  
（山口市大内御堀）

の概要を紹介した。出展、協賛した日本産業傘下の会社は、日産自動車・日立製作所・日本鉦業（現在、J文日鉦日石金屬）・日本水産・中央損害火災保険（現在、損害保険ジャパン）など十七社にのぼった。日産館には、旗の部分を含めると約二十一メートルの塔がそびえ、夜は赤と青のイルミネーションで飾られた。会期中、義介自身も萩を訪れ、博覧会を視察した。

日本産業は、博覧会への出展の効果を次のように総括している。まず、久原鉦業時代から萩地方と密接な関係にある日本産業の出展によって、博覧会の内容を一層充実させ、地方産業の開発に資するところ多大であった。次に、今まで持株会社としての日本産業及び日産コンツェルンの機構について認識不足の点が多かったが、傘下会社の出展が日産館内にまとまり、各社が相互に有機的な経済関係を保持している状態を具体的に見てもらうとともに、親会社並びに子会社間の関係を認識してもらうことができた。また、日本産業が単なる投資を営業とする信託会社ではないことを理解してもらうのに極めて有効であったとしている。

義介にとって鮎川家の故地萩で開催された博覧会には、特別な思い入れがあったのだろう。日本産業は、萩での博覧会に最初に出展した後、翌年、神戸での博覧会にも出展した。

#### 萩藩士鮎川家と鮎川義介

鮎川家は、萩藩主毛利家に仕える藩士であった。幕末期に描かれた萩城下町絵図を見ると、江向



無事就職したことが記される。そのほか、日記には工場設備の見取り図や機械部品のスケッチ、日本の知人に宛てた手紙の下書きなども記されている。なお、この三冊の日記は、現在、福岡県京都郡苅田町の日立金属九州工場铸件記念館に展示されている。铸件記念館は、日立金属の前身戸畑铸件の歴史と、創業者鮎川義介の遺墨や遺品などを展示、紹介している。

### 戸畑铸件の創業

明治四十二年（一九〇九）二回目の渡米から帰国した鮎川義介は、翌明治四十三年、福岡県戸畑（現在、北九州市）に戸畑铸件（現在、日立金属）を創業した。会社の創業にあたっては、井上馨の斡旋によって義弟の久原房之助や藤田伝三郎の甥にあたる藤田小太郎らから資金を調達した。井上は明治四十四年、建設中の戸畑铸件の現場を視察している。義介の旧制高等学校時代から支援を続けてきた井上



戸畑铸件工場を視察する井上馨 明治44年（1911）前列左から5人目が井上馨、8人目が鮎川義介（「創立廿五周年記念戸畑铸件株式会社要覧」）

介は、芝浦製作所（現在、東芝）に一職工として入社したが、明治三十八年に退社し、その年の終わりに予てから希望していたアメリカへ渡航した。

翌明治三十九年（一九〇六）

義介は铸件技術修得のため、パツファロー市の铸件製造会社ゲルド・カプラー社に見習工として就職し、一年余りをアメリカで過ごし、再び明治四十一年から一年半ほど渡米した。その間、義介は三冊の手帳に日記を残しており、一冊目の日記には、「<sup>Buffalo</sup> Buffalo Gould Coupler Co. 二入場ノ手續ヲ結了ス」と、



アメリカ留学時代の鮎川義介 右から3人目が義介（日産自動車株式会社提供）

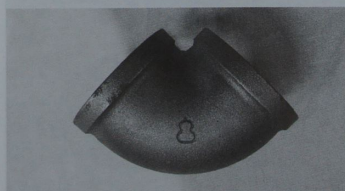


日立金属九州工場铸件記念館（福岡県京都郡苅田町長浜町）

にとって、義介が初めて興す事業が気がかりだったのだろう。  
 戸畑鋳物創業当時は赤字続きで、義介は実弟政輔の養子先である藤田小太郎家に資金援助を頼んだ。当時、小太郎はすでに逝去していたが、小太郎の未亡人の文から義介の人柄を見込まれ、資金援助を受けて経営を立ち直らせることができた。

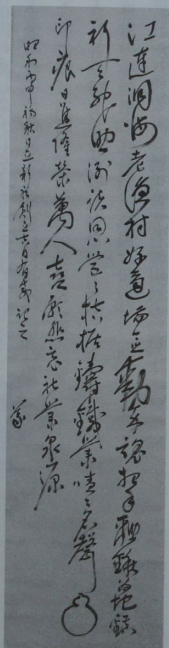
戸畑鋳物の工場は、戸畑駅の南側に建設された。創業当時の設備は、反射炉二基、造型機五台、焼鈍炉四基、ネジ切り機四台で、数名の鋳物師が生型造型作業を行い、手杓に溶鉄を受けて鑄型に運ぶという方法で製造しており、月に数トンの生産量であった。戸畑鋳物は東洋における最初の可鍛鑄鉄の生産を開始し、鉄管の継手は欧米に輸出され、可鍛鑄鉄の国産化と輸出を実現した。昭和五十五年（一九八〇）日立金属戸畑工場は、福岡県京都郡苅田町に本拠地を移し、九州工場として新発足した。

ところで、戸畑鋳物の商標は、「ひょうたん」の印だ。これは鋳物により強靱に、より滑らかに、より美しい曲線にとの思いを込めたもので、明治四十五年（一九一三）に商標登録された。継手は、ガスなどの気体や上下水道などの液体を輸送する管をつなぐものだが、家庭の継手の大半に「ひょうたん」のマークが入っている。「ひょうたん」



「ひょうたん」印の入った継手  
 (日立金属株式会社九州工場鋳物記念館蔵)

は、品質を保証するマークとして世界中に通用しているのだ。日立金属九州工場



鮎川義介揮毫書幅  
 (日立金属株式会社九州工場鋳物記念館蔵)

内にある鋳物記念館には、義介が揮毫した書幅が展示されている。この書は、昭和三十一年（一九五六）日立金属が日立製作所から独立するにあたり、義介が日立金属の前身戸畑鋳物創業当時を偲んで揮毫したものだ。書には、戸畑鋳物の「社業泉源」を忘れてはならないとあるが、「ひょうたん」印も書き込まれている。義介の「ひょうたん」商標に対する、強い思い入れがうかがえる。

### 日産自動車の設立

鮎川義介が創業した戸畑鋳物では、鋳物製品だけでなく、石油発動機や揚水ポンプなども製造していた。昭和三年（一九二八）ころからは、自動車部品の製造を始め、昭和六年にはダット自動車製造を戸畑鋳物の傘下に収めた。ついで義介は、昭和八年、戸畑鋳物に自動車部を創設し、ダット自動車製造の大坂工場を買収した。この年、同工場でダット号を改良したダットサン12型が誕生し

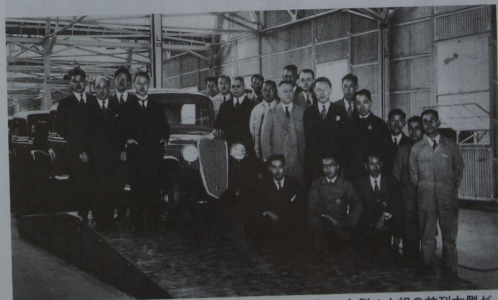
昭和八年（一九三三）義介は戸畑鑄物に自動車部を創設すると、同年、横浜市から新子安海岸埋立地二万余坪を買収し、自動車製造会社を設立した。翌昭和九年、義介は社名を日産自動車に変更し、本社を横浜の工場敷地内に置いた。昭和十年には、大量生産方式による一貫生産車第一号のダットサン14型セダンが、横浜工場で完成し、二年間で累計一万台の量を達成した。なお現在、日産自動車の日本社の建物は、日産エンジンミュージアムとして日産自動車が開発した歴代エンジンや自動車、日産自動車の歴史などを紹介、展示している。



日産エンジンミュージアム（旧横浜本社）（横浜市神奈川区）

た。このダットサン12型フェートンは、平成二十三年（二〇一一）わが国の自動車の歴史に優れた足跡を残した名車として日本自動車殿堂歴史車に選ばれた。

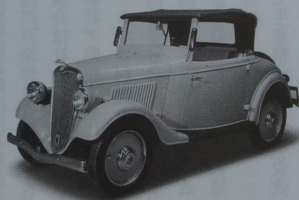
ところで、ダットサンの母型は、大正三年（一九一四）橋本増治郎が創業した快進社自動車工場で誕生した。その時、協力した田健治郎・青山祿郎・竹内明太郎の三人の頭文字を組み合わせ、「DAT自動車」と命名された。その後、快進社はダット自動車製造と改称され、昭和六年（一九三一）「DAT」の息子という意味の「DATSON（ダットソン）」を完成させたが、同社は戸畑鑄物の子会社となり、橋本増治郎の志は義介に引き継がれることになった。翌昭和七年、「DATSON」の「SON」は「損」につながるということで、太陽を意味する「SUN」に変更され、「DATSUN（ダットサン）」となった。ダットサンは、戦前は日本の小型車の代名詞、戦後は世界ブランドとして半世紀にわたり日本の自動車産業を牽引した。



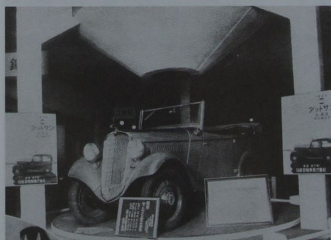
横浜工場生産第1号車の完成式 昭和10年（1935）左側4人組の前列右側が船川義介（日産自動車株式会社提供）

ことよって、大衆車として販売しようとしたのだ。今まさに義介が念願したとおり、自動車は一人に一台というような時代が到来した。ちなみに、ダットサン14型セダンの価格は千九百七十円で、当時、大学を卒業した銀行員の初任給が七十円だから、現在の貨幣価値では約六百万円弱になり、現在でも高級車扱いとなる。義介が目標にしていた「五百円自動車」は、約百五十万円に換算されるので、まさに大衆車としての価格設定を義介は目指していたのだ。

なお、日産自動車は初めて製造したダットサン14型は、昭和十年（一八三五）萩市で開催された「萩史蹟産業大博覧会」にも出展された。まさに出来立てほやほやのダットサンが萩市にやって来た。博覧会の会期中、日産館の入場者を抽選によりダットサンに乗せて、萩市内の名所や史跡を無料で案内するというイベントも行われた。



ダットサン14型ロードスター（日産自動車株式会社蔵）



萩史蹟産業大博覧会に日産自動車が出展したダットサン14型  
（『萩史蹟産業博覧会日産館写真帖』萩博物館蔵）

### 日産コンツェルンの構築

第一次世界大戦後の不況の影響を受け、久原房之助が創業した久原鉱業の経営は悪化の一途をたどった。このような状況下、鮎川義介は、房之助と親密な関係にあった田中義一（当時、立憲政友会総裁）から久原鉱業の立て直しを説得された。当初、義介は躊躇したが、親族などに相談した結果、経営の再建を決意し、親族や久原鉱業関係者の支援を受けて、短期間で久原鉱業の債務を整理していった。

昭和三年（一九二八）三月、義介は政治家へ転身した房之助の後を受けて、久原鉱業の社長に就任し、同年十二月、久原鉱業を改組して日本産業を創設した。日本産業は当時としては画期的な公開持ち株会社となり、昭和十二年には鉱業・工業・自動車工業・化学・水産などの各部門に、直系会社十八社を数えるまでになった。さらに、直系十八社の子会社は約百三十にも及び、日本産業は一大コンツェルンを形成し、三井・三菱に次ぐ企業集団に成長した。

なお、直系十八社は、日本鉱業（現在、JX日鉱日石金属）、日立製作所、日産自動車、日本油脂、日本水産、日産火災海上保険（現在、損害保険ジャパン）などで、いずれも現在わが国を代表する企業で、春光グループの主要会社となっている。昭和九年（一九三四）義介は、日産コンツェルン内の交流を図るため、親睦と情報交換を目的とした「日産木曜会」を創設し、昭和十二年に「日産懇話会」と改称した。

鮎川義介の絵画趣味

昭和十三年（一九三八）「日産懇話会」が発行した会報の「満州重工業開発会社重役趣味番付」によると、鮎川義介の趣味は絵と記されている。義介は、水墨画を描くことが得意であった。昭和十一年発行の『サンデー毎日』のインタビューで、義介は「十萬枚を念願にしているが、過去五年に二十萬枚しか描けていない。ほとんど毎日描いている」と言っている。さらに、義介は絵画の基本は○

戦後、GHQ指令の財閥解体によって、日産コンツェルンは解体されたが、徐々に再結集の気運が高まり、昭和三十七年（一九六二）に旧日産コンツェルンの主要十三社の社長が、東京都港区芝公園にある春光会館に集まって、社長会を結成し「春光会」と命名した。昭和四十一年には、関連会社を含めた七十二社による「東京日産懇話会」が発足し、その後「日産懇話会」、さらに「春光懇話会」と改称された。ちなみに、「春光」は、伊藤博文の子息で日本鉱業の社長をつとめた伊藤文吉の雅号で、春光会館は伊藤文吉の邸宅だった。

昭和十二年（一九三七）日産コンツェルンの本拠となった日本産業日産館が、東京市芝区田村町（現在、東京都港区）に完成したが、同年、日本産業は当時の満州国（中国東北部）に移駐した。社名を満州重工業開発と改称し、本社を満州国の首都新京（現在、長春）に置き、義介は満州重工業開発の総裁に就任した。

日本産業の満州国移駐を義介に勧めたのが、岸信介<sup>のほすけ</sup>であった



春光会館（東京都港区）

た。岸は、義介とは縁戚関係にあり、当時商工省の官僚として満州国産業部次長の役職をつとめていた。岸は満州開発五か年計画の推進のため、義介が総帥する日産コンツェルンを満州に移そうと企図した。満州国の産業開発を進めるためには、その基幹となる一大コンツェルンが必要とされたからだ。

当時、満州の実力者として「ニキニスケ」という呼称が使われた。「ニキ」は東条英樹と星野直樹、「ニスケ」は松岡洋右、岸信介、鮎川義介。東条は関東軍参謀長、星野は満州国総務長官、松岡は南満州鉄道の総裁だった。ちなみに、松岡は岸の叔父にあたった。

義介は満州開発にアメリカの資本を導入しようと画策するが、日米間の対立が決定的となり、さらに関東軍が満州重工業開発の経営に干渉を始めると満州開発に見切りをつけ、昭和十七年、満州からの撤退を開始した。

たむらいちろう  
田村市郎編

田村市郎と水産業の推進

田村市郎は、慶応二年（一八六六）一月二十七日、久原庄三郎の三男として萩の今魚店町に生まれた。藤田伝三郎は市郎の叔父にあたり、久原房之助はすぐ下の弟である。明治二十八年（一八九五）市郎は、母文の実家田村家の養子となった。田村家は萩の御許町の豪商で、嘉永六年（一八五三）萩城下の洪水被害を緩和するため、城下の北東近郊に開削された姥倉運河の工事にあたり、銀八十枚を藩に献納している。

明治四十年（一九〇七）市郎は、北洋漁業に乗り出し、翌明治四十一年、近代捕鯨の先駆者岡十郎と共同で、国産初の鋼鉄製トロール船第一丸を大阪鉄工所（Hitachi日立造船の前身）で建造し、汽船トロール漁業の経営を始めた。なお、岡は明治三年、阿武郡奈古浦（現在、阿武郡阿武町）の西村家に生まれ、



トロール船第一丸（日本水産株式会社提供）

と△を描くことを信念とし、正三角形を描きそれに内接する円を描く練習法を考案し、六年間ひたすら△と○を描き続けたという。

戦後、義介はGHQの指令によって公職追放されたが、昭和二十八年（一九五三）参議院議員に当選した。昭和三十一年には、日本中小企業政治連盟結成大会を開き、義介はその総裁に就任し、わが国における中小企業の育成に尽力した。

昭和四十二年（一九六七）二月十三日、義介は享年八十八で逝去した。その四十九日の法要日に、義介の長男鮎川弥一は故人を偲ぶよすがとするため、『墨戯集』と題した義介が描いた絵画の遺墨集を発行した。義介の遺骨は多磨霊園（東京都府中市）に埋葬されたが、山口市の洞春寺にある大叔父井上馨の墓所の一隅にも分骨された。



鮎川義介揮毫「猿図(のろず)」 昭和8年(1933)(株式会社損害保険ジャパン蔵)

その後、田村汽船漁業部は共同漁業に改組され、昭和四年（一九二九）から翌年にかけて、共同漁業及び関係会社の戸畑（現在、北九州市）への移転が敢行された。ここに、国司の掲げた漁業、製氷・冷凍・冷蔵、加工、流通、販売のすべての機能が集約された理想的な総合漁港が誕生した。戸畑漁港の概要を記したリーフレットによると、魚市場・荷揚場・製氷冷蔵工場・製罐工場・研究所などが備えられている。戸畑はトロール漁業の新たな根拠地になるとともに、消費地に向けた水産物供給拠点として体制を整えたのだ。

さらに共同漁業は、日本捕鯨・日本合同工船・日本食料工業などを合併し、昭和十二年（一九三七）日本水産を創設した。現在、北九州市の洞海湾に面し若戸大橋を間近に望む場所に、日本水産の戸畑ビルが建っている。このビルは昭和十



日本水産戸畑ビル（北九州市戸畑区、日本水産株式会社提供）

明治二十四年、阿武郡福川村（現在、萩市）の岡家の養子となった。

明治四十三年（一九一〇）市郎は、国司浩助をイギリスに派遣し、トロール汽船湊丸の造船監督の任につかせた。国司は明治二十年、旧萩藩士の乃美家に生まれ、明治二十六年、旧萩藩士の国司助十の養子となった。国司助十は、鮎川義介の父弥八の姉の子息にあたる。その縁戚関係から、国司は義介に相談し、水産講習所（現在、東京海洋大学）に学んだ。そして明治四十一年、汽船トロール調査のため、イギリスとドイツに留学した。

明治四十四年（一九一一）イギリスのスマス造船所で竣工した湊丸は、国司によって日本へ回航された。同年、市郎は湊丸の到着を待って田村汽船漁業部（日本水産の前身）を下関市に創業し、国司を責任者としてトロール漁業を推進していった。創業当初の事務所は、十二坪ほどの二階家と土蔵の建物だった。



計画当初の戸畑漁港（日本水産株式会社提供）

一年に落成し、戸畑漁港の司令塔としての役割を担ってきた。ビルの一階は、ニッスイバイオニア館として日本水産の歴史や事業などを展示、紹介している。

市郎は、昭和二十六年（一九五二）十一月二十六日、享年八十六で逝去した。墓は、東京都品川区の海晏寺にある。

## 参考文献

- ・秋田文化出版（康楽館）公式ガイドブック（秋田文化出版、二〇一〇年）
- ・安藤良雄「日本の歴史第28巻 プルジョワジーの群像」（小学館、一九七六年）
- ・浅井貞彦「ダットサン 歴代のモデルたちとその記録」（三樹書房、二〇一一年）
- ・鮎川義介先生追想録編集刊行会『鮎川義介先生追想録』（鮎川義介先生追想録編集刊行会、一九六八年）
- ・宇多川勝「昭和史と新興財閥」（教育社、一九八二年）
- ・大國晴雄「石見銀山歴史散歩」（石見地域デザイン計画研究会、一九九二年）
- ・小沢親光「鮎川義介伝」（山口新聞社、一九七四年）
- ・笠戸工場史編集室「笠戸工場史」（株式会社日立製作所笠戸工場、一九七五年）
- ・株式会社日立製作所創業100周年プロジェクト推進本部社史・記念誌編集委員会「開拓者たちの挑戦―日立100年の歩み―」（株式会社日立製作所、二〇一〇年）
- ・久原房之助翁伝記編集室「久原房之助」（日本鉱業株式会社、一九七〇年）
- ・小林英夫「満州と自民党」（新潮社、二〇〇五年）
- ・小林正彰「政商の誕生」（東洋経済新報社、一九八七年）
- ・齋藤實則「あきた鉱山盛衰記」（秋田魁新報社、二〇〇五年）
- ・下風憲治「ダットサンのおれえぬ七人」（三樹書房、二〇一〇年）
- ・週刊朝日「値段史年表 明治・大正・昭和」（朝日新聞社、一九八八年）
- ・春光懇話会事務局「春光グループの歴史」（春光懇話会事務局、二〇〇四年）
- ・春光懇話会事務局「春光懇話会会報 Wave 21 第112号」（春光懇話会事務局、二〇〇五年）
- ・社史編集委員会「創業百年史」（同和鉱業株式会社、一九八五年）
- ・新日鉱ホールディングス株式会社「新日鉱グループの百年」（新日鉱ホールディングス株式会社、二〇〇六年）
- ・砂川幸雄「藤田伝三郎の雄渾なる生涯」（草思社、一九九九年）
- ・武田晴人「財閥の時代」（新曜社、一九九五年）
- ・田中誠・吉成茂「天馬空を行く 久原房之助物語」（財団法人日立市民文化事業団、二〇〇七年）
- ・戸畑鑄物株式会社「創立廿五周年記念戸畑鑄物株式会社要覧」（戸畑鑄物株式会社、一九三五年）



- ・中岡哲郎『自動車が走った 技術と日本人（朝日新聞社、一九九九年）
- ・中冨邦一・成瀬仁蔵『吉川弘文館、二〇〇二年）
- ・日産自動車株式会社調査部『21世紀への道 日産自動車50年史』（日産自動車株式会社、一九八三年）
- ・日本鉱業株式会社五十年史編集委員会『日本鉱業株式会社五十年史』（日本鉱業株式会社、一九五七年）
- ・日本水産株式会社社史編纂室『日本水産百年史（日本水産株式会社、二〇〇一年）
- ・日本経済新聞社『私の履歴書 経済人②』（日本経済新聞社、一九八〇年）
- ・日本女子大学『写真が語る日本女子大学の100年』（日本女子大学、二〇〇四年）
- ・萩市史編纂委員会『萩市史第一巻』（萩市、一九八三年）
- ・萩市史編纂委員会『萩市史第二巻』（萩市、一九八九年）
- ・古川薫『夢はるかなる 近代日本の巨人・久原房之助』（PHP研究所、二〇〇九年）
- ・宮本又郎『日本の近代II 企業家たちの挑戦』（中央公論新社、一九九九年）
- ・藤田地区地域振興推進協議会『藤田の生い立ち』（藤田地区地域振興推進協議会、一九九三年）
- ・藤田錦干拓100周年記念事業実行委員会・岡山県

- 立興陽高等学校郷土芸能同好会・藤田学『藤田錦干拓100周年記念誌』蒼海から田園都市』（藤田錦干拓100周年記念事業実行委員会、二〇〇四年）
- ・藤田美術館『藤田美術館名品図録』（藤田美術館、一九七二年）
- ・藤田美術館『藤田伝三郎翁生誕百五十年記念館蔵名品展』（藤田美術館、一九九一年）
- ・前野絵里『藤田傳三郎と藤田美術館』（『茶道雑誌』第七十六巻第九号、二〇一二年）
- ・森川英正『日本財閥史』（教育社、一九七八年）
- ・吉川廣和『地域活性の源へ DOWAグループと石見銀山』（別冊太陽 石見銀山）平凡社、二〇〇七年）
- ・米本二郎『伝記久原房之助翁を語る』（シーブル、一九九一年）

### 資料・情報提供者

本小冊子をまとめるにあたり、多くの皆様や関係機関にご指導・ご協力を賜りました。記して感謝の意を表します。

上野治子・久原堯之・小池太一・坂井禎・須子英二・高橋俊二郎・伊達一美・田中恭子・田村浩子・坪井靖子・藤田基彦・増山史朗・諸井宏益・山田洋子（敬称略）

石見銀山資料館・大阪商工会議所・岡山県立興陽高等学校・岡山市第二藤田学区連合町内会・岡山市南区藤田地域センター・香雪之会・国立国会図書館憲政資料室・小坂鉦山事務所・小坂町総合博物館郷土館・JX日鉱日石金属株式会社・周慶寺・春光懇話会・株式会社損害保険ジャパン・株式会社損害保険ジャパン山口支店・DOWAホールディングス株式会社・日鉱記念館・日産自動車株式会社・日本水産株式会社・日本女子大学成瀬記念館・萩市立須佐歴史民俗資料館・萩市立萩図書館・萩市立明倫小学校・日立金属株式会社九州工場・株式会社日立製作所笠戸事業所・藤田観光株式会社・藤田神社・藤田美術館・山口県文書館・山口日産自動車株式会社（敬称略）

萩を知ろう！萩を楽しもう！萩を伝えよう！

■シリーズ「萩ものがたり」既刊タイトル

| タイトル名                         | 著者            | 定価    |
|-------------------------------|---------------|-------|
| ①萩の椿                          | 吉松 茂          | 600円  |
| ②高杉晋作100問100答                 | 一坂 太郎         | 500円  |
| ③萩開府—毛利輝元の決断—                 | 北村 知紀         | 600円  |
| ④萩まちじゅう博物館                    | 西山 徳明         | 600円  |
| ⑤松陰先生のことば—いまに伝わる志—            | 萩市立明倫小学校 (監修) | 500円  |
| ⑥密航留学生「長州ファイブ」を追って            | 宮地 ゆう         | 600円  |
| ⑦萩と日露戦争                       | 一坂 太郎         | 500円  |
| ⑧萩の巨樹・古木—城下町の歴史を語る生き証人—       | 草野 隆司         | 600円  |
| ⑨吉田松陰と現代                      | 加藤 周一         | 600円  |
| ⑩萩沖の魚たち (春・夏編)                | 中澤さかな / 堀 成夫  | 600円  |
| ⑪萩の史碑                         | 一坂 太郎         | 500円  |
| ⑫山田顕義—法治国家への歩み                | 秋山 香乃         | 600円  |
| 特別編 ますらをたちの旅【長州ファイブ物語】        | 一坂 太郎         | 1300円 |
| ⑬川柳中興の祖—井上剣花坊                 | 大庭 政雄 (監修)    | 600円  |
| ⑭高島北海 HOKKAI 萩とナンシー           | 高樹 のぶ子        | 600円  |
| ⑮桂小五郎—写真集—                    | 一坂 太郎         | 500円  |
| ⑯萩沖の魚たち (秋・冬編)                | 中澤さかな / 堀 成夫  | 600円  |
| ⑰若き日の伊藤博文                     | 一坂 太郎         | 600円  |
| ⑱宮本常一が見た萩—旅する民俗学者—            | 中澤 さかな        | 600円  |
| ⑲海を渡った長州砲—ロンドンの大砲、萩に帰る—       | 都司 健          | 600円  |
| ⑳萩往還を歩く—唐櫃礼場跡から防長国境付近まで—      | 中澤 さかな        | 600円  |
| ㉑吉田松陰 人とことば                   | 関 厚夫          | 500円  |
| ㉒晋作の生きた幕末と萩—経営評論家から見た—        | 江坂 彰          | 500円  |
| ㉓維新の精神—松本健一講演集—               | 松本 健一         | 600円  |
| ㉔萩の近代化産業遺産—世界遺産への道—           | 道 迫 真 吾       | 600円  |
| ㉕作家たちの萩 上巻—萩ゆかりの作家たち—         | 高木 正 熙        | 600円  |
| ㉖作家たちの萩 下巻—萩を舞台にした小説や紀行—      | 高木 正 熙        | 600円  |
| ㉗浪漫陶々                         | 三輪 休雪         | 800円  |
| ㉘長州ファイブ物語—工業化に挑んだサムライたち—      | 道 迫 真 吾       | 600円  |
| ㉙萩の火山のひみつ—阿武火山群—              | 永尾 隆 志        | 500円  |
| ㉚萩・北浦のクジラ文化                   | 清水 満 幸        | 600円  |
| ㉛絵園で見る萩の街道—萩往還・石州街道・赤間街道—     | 山田 稔          | 600円  |
| ㉜萩の郷土料理・家庭料理                  | 中澤 さかな        | 500円  |
| ㉝日本の近代を拓いた萩の産業人脈—企業家たちの情熱と挑戦— | 樋口 尚 樹        | 600円  |
| ㉞吉田松陰の生涯—池田屋事変で散った松陰門下の逸材—    | 一坂 太郎         | 600円  |

※郵送でのご購入は、萩ものがたり事務局まで電話・FAX・Eメールでお申込みください。

萩ものがたりは、定期購読ができます。

年会費2,000円にて、年間4タイトル(4・10月発行)を定期配本。

- \* 定価割引の特典があり、確実にお手元に、送料は無料!
- お申し込み方法 ハガキ・FAXでの申込み 住所、氏名、電話番号をご記入ください。
- 電話・インターネットでの申込みもお受けします。
- 会費のお支払い方法 申込みと同時に郵便振替用紙をお届けします。
- 銀行からの口座引き落としもできます。

一般社団法人 萩ものがたり  
〒758-8555 山口県萩市大字江向510番地 TEL 0838-25-3233 FAX 0838-26-5458  
http://www.city.hagi.lg.jp/book/booklet.html E-mail story@city.hagi.lg.jp

※本丁本は発行所宛にお送り下さい。送料発行所負担にてお取り替えいたします。

刊行のことは

山口県萩市は、本州西端に位置し日本海に面します。江戸時代は毛利三十六万石の城下町として栄えました。幕末には吉田松陰をはじめ多くの逸材を輩出した明治維新胎動の地として知られています。

このようなことから全国に例をみない近世の都市遺産、明治維新関係史料や史料、近代日本の礎を築いた多くの人物に加え、北長門海岸国定公園の自然美など。宝物。ともいべき資源に恵まれています。

しかしながら、明治維新は風化しつつあります。承されてきた物語などが消えつつあります。

毛利輝元が安芸の国(広島県西部)から萩の地に移封され、開府してから、平成十六年(二〇〇四)は四百年の節目となります。

そこでこれを機に、萩に残る厚みのある歴史文化・人物、豊かな自然、多様な行事や風物、民間伝承、伝統産業など、後世に語り継ぐべき萩のすべてをブックレット・シリーズ「萩ものがたり」として定期的に刊行し、後世に伝承するとともに、全国に向け発信することとしました。

読者の皆様が、この小冊子を活用され、萩の素晴らしさを楽しみ、理解する一助となるよう願っております。



著者紹介  
樋口尚樹

一九五四年山口県萩市生まれ。山口大学文学部文学専攻科修了。専門は日本近世史。萩博物館館長。萩藩の触書を通して萩城下町の諸相を読み解くとともに、自然環境とのかかわりについても研究。主な著述は、「萩博物館調査研究報告」に「萩藩主毛利家一門大野毛利家の上屋敷の変遷について」、「萩城跡指月山の植生の変遷について」など。

定価 600円 (本体571円+消費税29円)

明治期、関西財界のリーダーとして君臨した藤田伝三郎を源流とする、久原房之助（伝三郎の甥）・田村市郎（伝三郎の甥）・鮎川義介（房之助の義兄）ら萩ゆかりの企業家たち。

彼らは、明治維新以降、近代化の潮流の中で日本の産業を切り拓き、自動車・鉄道車両・金属・水産・観光など現在の日本を代表する企業の基礎を築いた。彼らの夢と情熱をかけた挑戦の軌跡を追う。

二〇一二年は藤田伝三郎の没後一〇〇年にあたる。



萩市立萩図書館



111598322

39

萩

ものがたり

Vol 33

日本の近代を拓いた萩の産業人脈  
— 企業家たちの情熱と挑戦 —

2012年4月1日 第1期発行

著 者 樋口尚樹  
発行所 一般社団法人 萩ものがたり  
印 刷 有限会社マシヤマ印刷